

一・荻島飛行場の突貫工事と戦闘機の不時着事件

かつて越谷から岩槻にかけて陸軍の飛行場があった事実が忘れられようとしている。しかし今もなお兵舎や蓋をした暗渠、飛行場の一部であった施設の跡が残り、当時の滑走路や誘導路が一般の道路として利用されている。越谷の荻島村から岩槻の新和村にまたがる広大な飛行場であった。地元では通称「荻島飛行場」「新和飛行場」とか、新和村論田地区にあったので「ロンデン飛行場」とも呼ばれた。正式名は陸軍の「東部軍越谷飛行場」である。最初は川柳村の柿ノ木耕地に飛行場ができるとの噂が広がっていた。ところが終戦の前年、昭和十九年七月に地元の農家十三軒が陸軍から呼び出されて強制的に立ち退かされた。そして沼の方耕地・論田耕地と呼ばれた地域に飛行場の建設が始まった。当初は飛行場設定隊の七百名によって開始された。その後、近隣の住民の勤労奉仕や動員された朝鮮の人によって炎天の日も雨天の日も人海戦術で突貫工事が行なわれた。終戦の年の八月下旬に完成したという（註①）。また「川のあるまち」第三十三号の荒谷仁氏著「ロンデン飛行場史話」によると、

「ロンデン飛行場建設の目的は、太平洋戦争も終息の兆しが見え出し、米軍の本土爆撃を想定し、その米機を迎え撃つ友軍機の給油基地として急遽、朝鮮人労働者を主体として昼夜兼行、突貫工事で仕上げた、言わば泥縄式工事の飛行場だった。各地区の農民は生活の糧を得る尊い田畑を建設のため強制的に没収された(中略)建設のための資材堆積場は現在の越ヶ谷小学校のやや右寄りの東武線下だった。その下の草地に資材を下ろし、浦和、岩槻両街道を連日トラックが砂塵を巻き上げながら猛スピードで運搬をしたのだった。」と述べられている。

荻島飛行場の滑走路は軟弱なために滑走路をバウンドしながら止まりきれずに荻島飛行場の北端の外堀にぶつかって、でんぐり返しした一機（陸軍の「隼」・写真1）があった。越谷市中町の金谷邦弘氏が父から直接聞いた話によると、父の金谷政勝氏（註②）は、元は満州の関東軍に属していたが、千葉県九十九里浜近くの陸軍の東金飛行場に移ってきた。そこから東金飛行場より飛びたつたが、途中飛行機の調子が悪くなり、この未完成の飛行場に不時着したという（註③）。後に、本町一丁目（中町）に移り住み、金谷電気商会を設立したのである。平成二十七年九月、その時の不時着の様子を小曾川の中嶋瑛治氏から伺った。終戦の年、十歳の頃のこと、七夕の準備をしていた日なので、前日の月遅れの八月六日か七夕当日の七日に、現・越谷西高校の南端ででんぐり返って止まり、操縦席から白いパラシュートに包まれて操縦者が救出されたのを覚えている。

もう一つの目撃談がある。「ロンデン飛行場史話」より抜粋する。「終戦近く、多くのベテラン操縦士が戦死をし、予科練出身の未熟な操縦士が乗った戦闘機が、右車輪を滑走路から外し、整備兵がとんで来て逆さまになった機の天蓋（搭乗口のふた）を開け、軟弱な地面に穴を掘り操縦士を引っ張り出すという有様を目の当たりに目撃した。」という。これ以外は一度も利用されなかったといわれているが、荒谷氏によると「雷電」戦闘機や「屠龍」爆撃機が着陸した（註④）そうである。そして十五日の終戦日を迎えることになり、地元の方しか飛行場の存在が知られず陸軍が実戦活用することもなく、謎に包まれた幻の飛行場となったのである。

二・荻島飛行場の滑走路

滑走路の名残が現在も道路として利用されている。「しらこぼと水上公園」から南方に向けて一直線に伸びている道路がある。コンクリート製だった滑走路の名残である。滑走路の北端はしらこぼと水上公園の歩道橋の下あたり、南端は小曾川との境界線のそばの、さいたま市岩槻区末田一二の一あたりである。長さは一五〇〇メートル、幅は三十三間（六〇メートル）である。現在の道路の幅は十分の一の六メートルほどである。

この飛行場を設計し、その責任者となった人は、国から陸軍の越谷飛行場の工事長として派遣されてきた高木実氏（註⑤）である。飛行場の建設がきっかけで戦後は東小林に住むこととなった。ここに掲載された越谷飛行場の工事の様子の写真2は、高木実氏の御子息の幹男氏からの提供である。この辺りはぬかるみの多い湿地帯で、ここに土盛りして飛行場を作った。国道463号の南側の釣上にある新堀池は土盛りに利用するために土を掘ったためにできた池である。また、東越谷の河畔砂丘上にある東福寺の裏の砂を切り崩して飛行場に運んでいる。滑走路に対して飛行機を導く誘導路は、滑走路の北端と南端を東側に突出した半円形で結ばれていて、現在でもその大部分が道路として使用されている（写真3・図1と2、写真6）。

平成17年8月21日に、谷岡隆夫氏、磯谷知子氏と私の三人で当時93歳の田島喜一宅にお伺いした。長時間かけてお聞きした時の私のメモをもとに田島氏の言葉を生かして私なりにまとめると次の通りである。

「滑走路の東端の側溝跡が、平屋の柔道場と田島家の母屋の間にある田島家庭先の南北の垣根の下に今もあり、柔道場の南側に広がるコンクリートは滑走路の名残である(写真4 現在は取り払われその名残が全くない)。大粒の砂利が混じった質の悪いコンクリートである。そしてこの飛行場は練習機や戦闘機といった小型飛行機に使用するために建設されたと聞いている。

終戦後、滑走路のコンクリートは、街の業者によって東京の復興のために砕かれてただで運ばれた。そのため農道が業者のトラックで痛んだ。そこで田島から、その東京の業者から二百円の通行税を取るようにはと提案し、話し合いの末にそれが実行された。

滑走路の東西に並行して見られる暗渠(註⑥・写真5)は、現在の道路から東西約二百メートル離れている。戦車が通っても壊れないという頑丈な蓋とされている。特に西側の暗渠は今でもほぼそのままの状態である。

隣接した高曽根の田んぼの中に飛行場の施設の一部がある。しらこばとメモリアルパークの南方百七十メートル西側暗渠の西方に格納庫跡と伝わるコンクリートの床下壁が残っている(写真6)。さらに西隣には巨大なコンクリート台と小さなコンクリート台の残骸が並んで用途不明のままひときわ目立って残っている(写真7)。また、田んぼの畦道に最近までコンクリートのかげらがみられていた。

飛行場周辺には兵舎が兵隊屋敷として点在していたが、そのうちの一箇所建物が今でも残っている(写真8)。

四、戦後の連合軍の進駐

岩槻市史編1115頁より抜粋 資材不足、輸送船不足

「(戦後となる昭和20年)10月11日には、新和村と荻島村にまたがる新和飛行場にも四百人ほどの連合軍将兵が進駐してきたが、これら将兵は駐留期間中飛行場周辺町村の住民とさまざまなトラブルを起こしていた。殊に越谷地域に数多く生息していた白子鳩は進駐軍の銃による乱獲で絶滅に瀕したと言われる。この新和飛行場の進駐軍は翌21年1月、行き先は不明ながら越谷久伊豆神社境内に山と積まれた上陸用舟艇^{しゅうへい}とともに移動し、不安におののいていた周辺町村はようやく静けさを取り戻したという。」

さらに「ロンドン飛行場史話」(荒谷仁氏著)の中に次の記述がある。

「真夏の暑い日、日本は終戦を迎えた。連合軍(四百人程度)が飛行場の処理のため進駐するまでのわずかな間、無統制で誰でも自由に入ることができた。私達(荒谷仁氏ら)は、興味と珍しきで、びくびくしながら入り込んだ。飛行場の奥深く、そこには生まれて初めて間近に見たり触れたりすることのできる二機の「隼」戦闘機(註⑦)が放置されてあった。」という。後に、放置された戦闘機は連合軍の手により無残にもスクラップとしてトラックに積まれどこかに搬送されて行ったそうである。1年余り連合軍(進駐軍)に接収されていたのである。

※平成17年11月第37回越谷市民文化祭での出品可能作品は一人一点に限られていたために、私は「旧南百・四条・別府・千足の石仏」のみを出品し、磯谷知子氏の名前を借りて「戦後六〇年の幻の荻島飛行場」を発表。

平成27年6月後半〜7月の第14回「七夕フェスタ」(「はつと越谷」主催)にて「戦争遺跡・幻の越谷飛行場(俗称・荻島飛行場)」を発表。以上の二点を元に改定増補してこの資料を作成する(令和5年12月加藤幸一)。

註① 岩槻市史通史編一一一五頁に次のように記述されている

「昭和十九年にはいると本格的な本土空襲が始まり、飛行機や軍需工場が地方に分散するようになった。市域でも新和村と荻島村にまたがる新和飛行場(越谷飛行場)の建設が昭和十九年七月に始まった。(中略)当初は昭和十九年九月二十日完成予定であったが、悪天候その他で著しく工事が遅れ、翌年にわたってしまった」

海外からの輸送船と資材不足も深刻であった。なお朝鮮の人は地元民家の物置などに宿泊して工事に携わった。註② 金谷政勝氏は大正9年3月生まれである。銃剣道7段の腕前で指導者で飛行機のパイロットの指導教官でもあったようだ。元は満州の関東軍に属していたが、抜擢されて本土の東金飛行場に移動してきた。満州

には天長山^{てんちやうざん}という山があり、戦後その名前から採用した「天長会」という仲間同士の交流メンバーの一人。

図1 滑走路と誘導路、暗渠

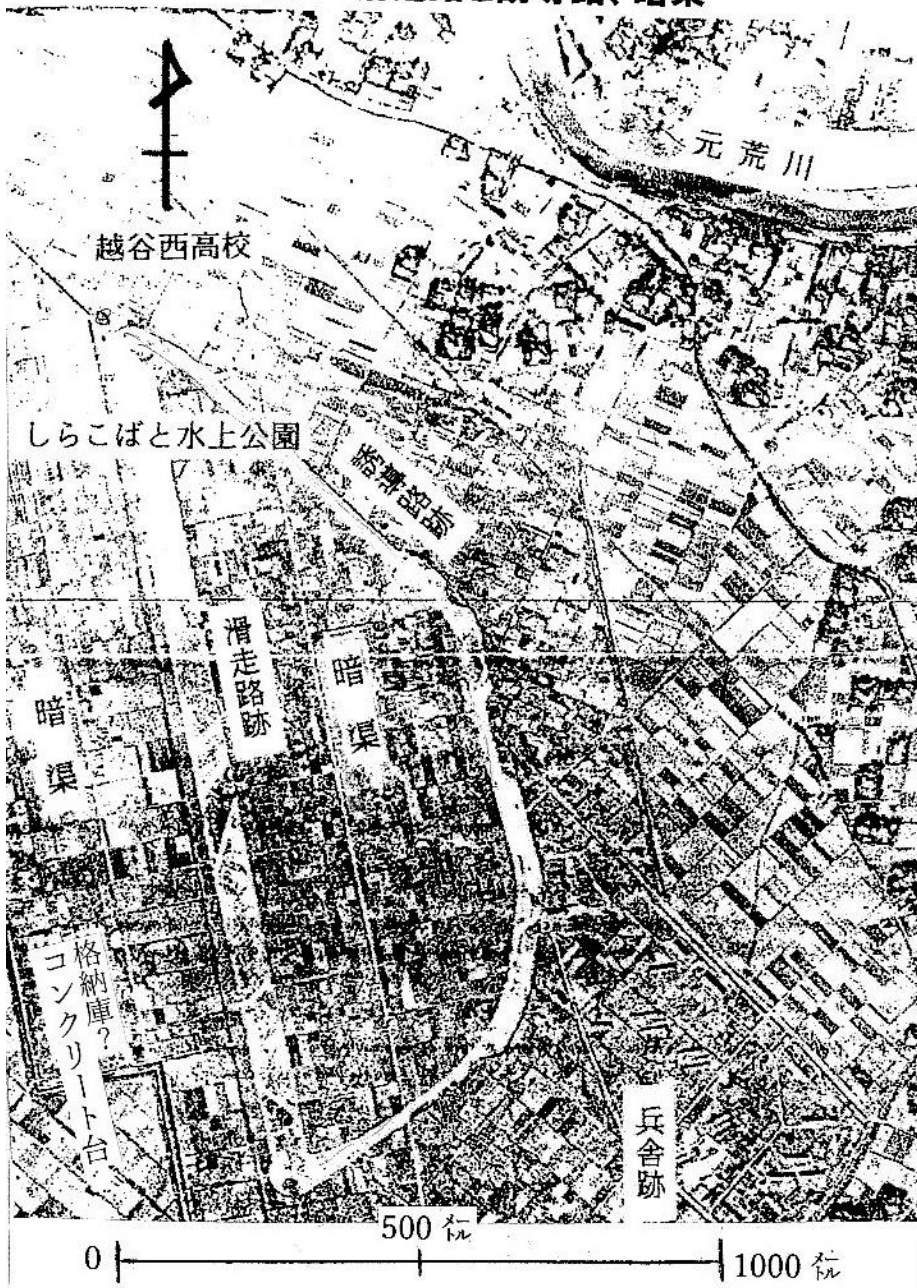


写真1「隼」



はやぶさ 隼 戦闘機 (インターネットより)

写真2 整地の様子



越谷飛行場

滑走路の整地の様子
高木幹男氏所有の写真

- 註③ それとは別に、不時着した操縦士は岩槻藩主の後裔である大岡氏であるとの説も根強く残っている。 3
- 註④ 平成27年3月発行「川のあるまち第33号」の「ロンドン飛行場史話」(荒谷仁氏著)によると、荒谷氏の目撃により荻島飛行場は四度ほど使われたという。でんぐり返りながら不時着した戦闘機があった。「雷電」戦闘機や「屠龍」爆撃機が着陸した。さらに戦後、米軍のP51戦闘機が不時着したという。
- 註⑤ 荒谷仁氏によると、高木実氏は東部陸軍経理部陸軍建技大尉だという。
- 註⑥ 地元では「めくら暗渠」と呼ばれていた。たぐさんの穴が規則正しく開いている。
- 註⑦ 東側の暗渠は、石川ピーシー工業の倉庫(末田一九四の一)そばの暗渠がその名残を残している。
- 註⑧ 二機の隼のうち一機が、バウンドしながら外堀に衝突してでんぐり返しになった隼であろう。



写真3 滑走路の離陸する地点



歩道橋の下あたりから前方が滑走路の名残の道路。離陸するときは、ここから前方(南方)に向かう。滑走路の幅は、現在のこの道路の6倍もあった。

(図2・写真9)

図2に内堀、外堀がみられるが、内堀(堀)は飛行場を囲むように掘ってあって、ほとんど水はなかった。外堀は農道と水路が隣同士で水はたくさんあった。

ダミーの飛行機の設置

茨島飛行場の周辺にベニヤ板の模造の飛行機が置かれていたとか、滑走路の西側沿いにも模造の飛行機が滑走路に沿っていくつも置かれていたとの古老からの話を聞いている。米軍機のおとりとなるダミーの飛行機の翼の両側には日の丸がついていたそうである。



写真5 滑走路と並行の暗渠



写真4 田島家にあった、かつての滑走路の名残のコンクリート(平成17年当時)

写真9. 荻島飛行場(正式名・越谷飛行場)の
米軍提供航空写真



写真7 巨大なコンクリの台
地元では「飛行機の洗濯場」と呼ばれた。



写真6 コンクリの土台跡
地元では格納庫と呼ばれる。
主に飛行機の修理棟か？
格納後は尾ヶ崎にあった隠し格納庫。

図3 新堀池 土を取られてできた池



他に、リサイクルプラザの地も土が取られて長方形の池ができた所である。



写真8 兵舎跡

上官は平屋の兵舎には寝泊まりせず、近くの農家の家を間借りした。自動車もこの農家に上空から見えないように隠した。

五・荻島飛行場（正式名：越谷飛行場）の隠し格納庫跡（隣接の尾ヶ崎）

旧・尾ヶ崎村の東側には、北から南に向けて伸びる半島状の台地がある。南端は新和（にわわ）小学校の北東方向にある。地元では「七島（ななしま）」と呼ばれていた。「昔、七つの山（台地）が連なるように南方に突き出していた」からそのように呼ばれたという。

終戦間際、陸軍の越谷飛行場（地元では俗称、新和飛行場）の建設にともない、この台地は飛行機を守り隠すために設置する格納庫「掩体壕（えんたいこう）」として何カ所か削られ、複数の格納庫ができたのであろう（**図4**・写真**10**と**11**）。地元では「掩体」と呼ばれた。それにもない飛行場からの誘導路も作られる予定であったと思われる。

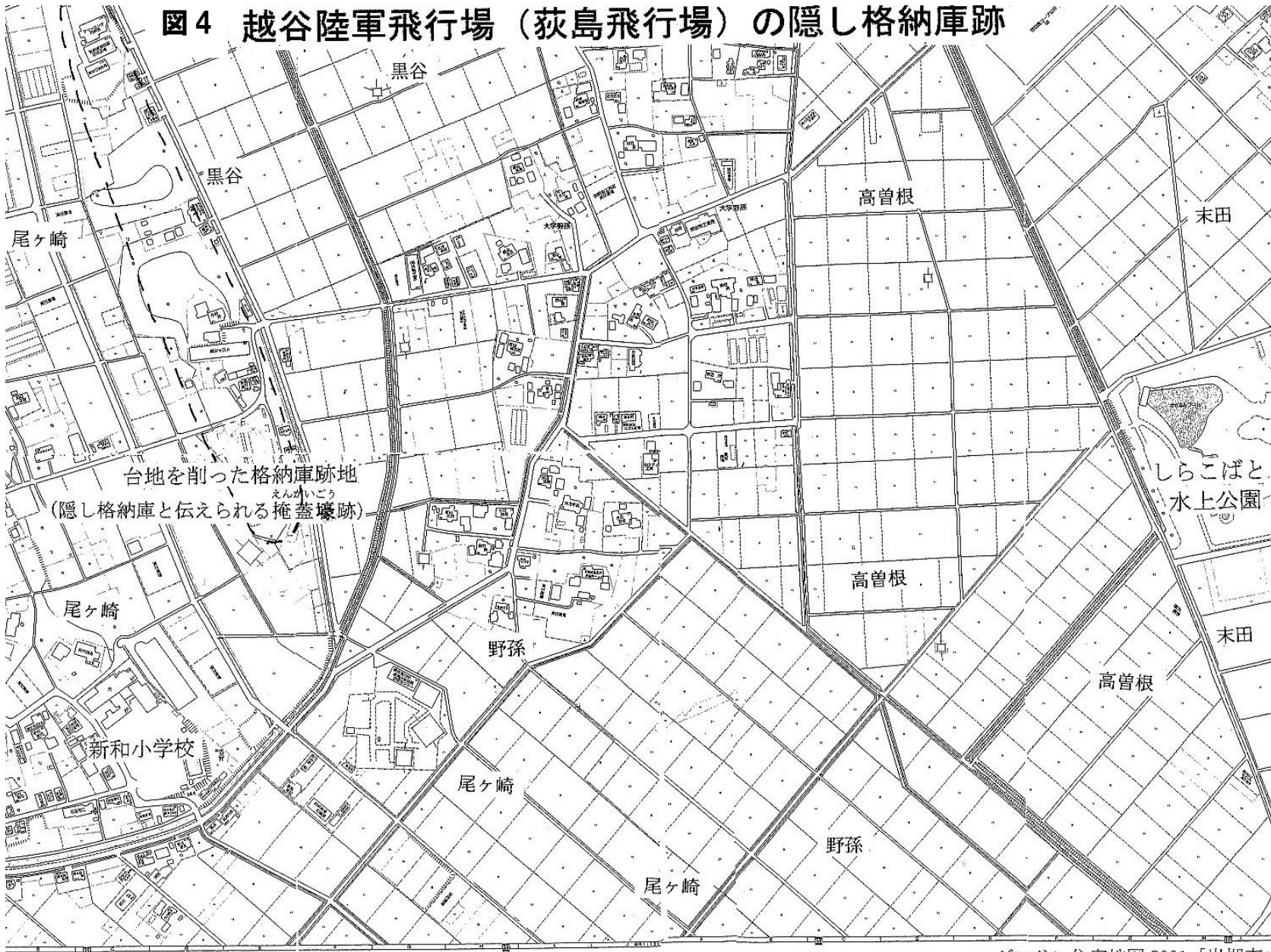


図4 越谷陸軍飛行場（荻島飛行場）の隠し格納庫跡

ゼンリン住宅地図 2001「岩槻市」

写真 10



尾ヶ崎の台地の西側から台地の中央部より北方を見る

写真 11



同地点から正面の台地の南部を見る

図5



ゼンリン地図「越谷市」(2020年10月)

六・荻島に置かれた探照灯

現在の越谷・岩槻線の道路脇に探照灯が設置されていた。その場所は、会田家の敷地内の北西の端に発電機がおかれ、その北北東に会田家からのケーブルで結ばれた探照灯が置かれた(図5)。会田家敷地内には発電機や自動車の小屋があるが、木々で覆われて上空からは見えないようにしていたという(会田隆之氏)。

七. 「高射砲陣地」

会田隆之氏によると直径が80m程の高射砲陣地があったという(図6)。さらに「凸部の先端部分の中央の高さは4m、両端は低くなり2m位だった。子供の頃、飛行場に潜り込んでこの高射砲陣地の回りの円形部分の土手の上に登って歩いたり、土手の急斜面をこわごわと降りたりして遊んだ覚えがある。土手に囲まれた円形の内部の地面はコンクリートで、そこに大と小の高射砲が離れて左右に置かれていた。さらに高射砲で敵機を目標して実際に使われていた様子を遠くから見ていた。米軍機B29に全く届かず、用がなされなかった。」という。

図6



ゼンリン地図「越谷市」(2020年10月)

八・「射撃場」と呼ばれた残土の小山

左の写真12は、砂原の竹内和子氏からの提供である。陸上競技場から東へ150メートル先、第2競技場の北東の隣の十字路あたりに、地元では「射撃場」と呼ばれた人工の小山があった(図6)。その小山とその前で撮影された記念写真である。昭和二十二年三月のことである。この小山は戦後になって飛行場が撤去されたときの残土を集めたものではないかと推測する。その後、この小山の土は地元の農家の家々に分配されたそうである。

このあたりを「射撃場」と呼ばれた由来は、高射砲陣地や弾薬庫があったことから、戦後になって射撃場と呼んだのであろうか。戦時中は実際には射撃場は無かったし、射撃場は別の所にあつた(図2、及び左のコラム)。この射撃場と呼ばれる地に戦後できた小山も「射撃場」と呼んだのであろう。弾薬庫は会田氏によると、土嚢を積んで上空から分らないようにしていた。中に入ると木箱に入って砲弾がうずたかく積み上げてあつたという。

写真 12



戦時中の「射撃場」について (会田隆之氏からの聞き取り)

飛行場の南東、滑走路と新田地区にある兵舎との間に射撃場があつた。射撃場の塹壕が5ヶ所あつて、それぞれ壕の回りを土嚢で積み上げて上空から射撃場とはわからないようにしていた。毎日兵隊さんが朝から晩まで入れ替わり立ち替わり塹壕にやって来て、前方に立て掛けた的まねに向かって実射訓練をしていたという。

九・戦中の荻島国民学校 (現在の荻島小学校)

昭和十六年、荻島尋常高等小学校が荻島国民学校になるが、昭和二十年四月になると、荻島飛行場の兵舎が足りなくなったため陸軍に接収され、校舎は兵舎の代わりとなった。そのため児童はこの校舎では学習できなくなり、浄山寺、玉泉院、西教院の3つに分かれて学習することになった。戦時中のことである。

写真 13



十. さいたま市岩槻区南平野の稲荷神社にある記念碑

稲荷神社の記念碑が飛行場の滑走路のコンクリートを利用している。

南平野の稲荷神社にある記念碑の表面

荻島飛行場（正式名：越谷飛行場）の滑走路の
コンクリート使用

写真 15



記念碑裏面、荻島飛行場の滑走路のコンクリート使用

「碑石ハ新和飛行場ヨリ運搬使用セル一片」（碑文の一部）と刻まれている。
「新和飛行場」は別名「荻島飛行場」とか「論田（ろんでん）飛行場」とも呼ばれた。

写真 14

